花咲く長作

咲く長作

〈付〉短歌　落穂集

小池筆子

小池筆子

明治三十八年十月八日、長野県上伊那郡松島坂井に、父浦野島太郎、母うめの次女として生まる。
旧伊那高等女学校卒。
大正十四年三月二十八日、伊那市西町小池傳衛に嫁す。
現在は、伊那市にて農業に従事、七十才。

花咲く長作

―ある伊那びとの生涯―

昭和五十年五月三十日　発行

著者　小　池　筆　子

長野県伊那市西町沢

〒三九六・☎〇二六五七―二―三三八九

制作　主婦の友出版サービスセンター

東京都千代田区神田駿河台一―六

〒一〇一・☎東京(〇三)―二九四―一二一

印刷・製本　三和印刷株式会社

花咲く長作　目次

花咲く長作 …… 3

長作と茂男 …… 4
村の四季 …… 12
信濃屋の葬式 …… 37
仏がついている男 …… 49
紙風船と手風琴 …… 87
思いやりと辛抱 …… 119
機織(はた)る村 …… 136
己れこそ己れのよるべ …… 160

〈付〉短歌　落穂集 …… 181

題字　藤田葦邦

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

花咲く長作

――ある伊那びとの生涯――

私の育った箕輪町の松島坂井に、長作という墓穴を掘ることを自分の職業とし、一生を終わった人がありました。知恵おくれに生まれながら、墓穴を掘る以外に僅かな仕事を見つけて生活の糧にし、また一つの根性も持ち、六十年を生き抜いたその人のことと、その頃の農家の生活の一部を、織りまぜて綴ってみました。当時の様子を少しでもわかっていただければ嬉しいと思います。

「花咲く長作」という題名は、文中にも紹介した、土地の子供たちの長作への囃しことばから生まれたものです。

なお、藤田葦邦先生に題字のご染筆を賜わり、心から厚く御礼申し上げます。

長作と茂男

二、三日吹き荒れていた駒ガ峰おろしの風が夕方になって止んだと思うと、夜になってから細かな雪が、篩から落ちる粉のように、さんさんと降ってきた。それはいかにも大雪になりそうな気配であった。

戸締まりをすませ囲炉裏の灰を掃き寄せて、おつまが寝ようとした時だった。表の潜り戸を誰か叩く音がした。

「今晩は、今晩は、もし、お休みなさったかね、ちょっとお願いがあって上がった者だがねえ」

と、またとんとんと戸を叩くのだった。潜り戸へ口を当てるように言っているその声は、若い男の声で、物の言い方、戸の叩き方に怪しさはなかった。おつまは、

「へえ」

と一声返事をすると、暗い土間へ下りて急ぎ潜り戸の心張りをはずした。戸口には若い男が立っていて、被っていた襟巻を肩へ下げると、

「今晩は」

とお辞儀をした。そしてすぐ、

「どうもこんな遅くに上がって申し訳ないね。実はわしゃあ、大泉（南箕輪）から来た者だけれどね、今日の夕方、北屋のおじい様が亡くなってねえ、お弔いを明後日するそうでござんす。それ

で、あのう、穴掘りのことを、一つよろしくお願いしたくて来ましたけれど」
と、おつまの顔を見ながら、ちょっと言葉を切ってから繰り返すように、
「わしゃあ、北屋の隣の者で、お使いを頼まれて来ました。どうかよろしくお願い申します」
と言って丁寧に頭を下げた。そして後ろを振り返り、ちょっと眉をしかめ、
「生憎、降ってきて」
とつぶやくように言った。
「それはそれは、まあお気の毒な」
と言ったおつまは、用件も用件だし時刻も時刻なので、おはいりなすってとは言わず、
「ちょっと、お待ちなすって」
と言うと、土間のかたわらの小部屋へ行って、何か小声で言ったかと思うと、すぐまた顔を見せた。
「穴掘りのこと承知しました。お気の毒なことでございます。どうかあちらへよろしくお願い申します」
と言うと、若者はほっとしたように、
「へえ、ありがとうございます。ああ、差しつかえがなくてよかった。それじゃあ、お願いします」
「ご苦労様でございます。もう遅いことだし、原道(はらみち)にお気をつけなすってね」
とおつまは、美しい丸髷の頭を下げた。
「ありがとうございます。じゃあ、ごめんなすって」

と言うと、手拭の上に襟巻を重ねて頬を包み、着ゴザを被ると、中からしっかり前を合わせて、

「お休みなさんしょ」

と言った。

隙間なく降る雪に白くなった道を、足早に去って行く若者を見送りながら、おつまは今夜一晩に積もる雪の量を思ってみた。

おつまの主人の弟に、名前を長作という、墓穴掘りを職業にしている者があった。死亡する人があれば、頼まれて墓穴を掘った。職業柄、どんな悪天候の日でも、また暑い寒いも文句なしに掘り上げた。そして非常に巧みであった。

伊那の松島町を東へ下った所に坂井という部落がある。小さいながらも北方と南方に区別されていた。長作はその北方の森ノ下という旧家に生まれた。家の後ろに大きな榎の木があり、そのかたわらに祠があって、その祠を包むように、二本の椹の木が枝を交え森の形をしていた。それで森の下の家と人が言ううちに、いつしか森ノ下になり、それが家名となってしまった。

長作は明治九年二月、この森ノ下の家の三男として生まれた。それは西南の役の前年であった。丈夫な子に生まれたが、育つにつれ、知恵おくれの子であることが、その動作に現われて見えた。いけないことに、その次に生まれた茂男も知恵おくれで、そのうえ体も弱かった。この二人の子供があってから、父の清作と母のおかねの間では、話してみてもどうにもならない話が交されるようになった。

姑も子供も寝てしまった冬の夜、夫婦二人は炉端で稗を煮ながら夜なべをしていた。

「どうしてわし達に、あんな子が二人も生まれたのかねえ」
と、おかねは清作の顔は見ずに針先を見つめてつぶやくように言った。清作はちょっと眉をしかめ、
「おめえ同じことをなんど言ったら気がすむだ」
清作は夫婦二人になれば決まったように、長作と茂男の話になるのでやり切れなかった。二人が生まれない前は、祐一や秀三郎を中心に、仲のよい二人はよく笑ったものだった。
「神様から授かったんだよ、子供は授かりものだというが、全くのことだとつくづく思うよ、なんとかどうとかして大きくしてゆくさ」
と言いながら草履(ぞうり)を編む手を止めて薪をつくろった。
「大きくするもしないもない、一年増しに大きくなっていくよ、だけどわしゃあ、その大きくなっていくのがとても気がかりでねえ、大きくなるにつれて少しでもよくなってくれればいいけれど」
と、おかねはほっと息を吐いた。
「うむ、そりゃあ利口になるなどとは思わないよ。俺あそんな欲は持たねえ、ただなあ、いいことと悪いことの区別ができりゃあ、それで充分だよ。世間様にすまねえことをしたり、迷惑をかけたりしなきゃあ、それでいいと、そう思わなきゃあ」
と言葉をやわらげ、そばの叩き藁を抜くと、手早に編みながら、
「そりゃあ、俺だって色々考えて眠れねえ晩だってあるよ。あれ達より長く生きるわけじゃあなし、兄い達の世話にならなけりゃあならんでなあ、だもんで、祐一や秀のことも思って、少しでも

余計働いておかなきゃあならんと思ってなあ。考えてみりゃあ、みんな不仕合わせよ、子供達も俺達も」

と清作は自分に言うように言った。おかねは針を置くと、煮え立って噴きこぼれる稗を棒で掻きまぜながら、

「そんなふうにお前さん言うなら、長作や茂のことで腹が立つことがあっても、他の子やわしにガミガミ当たらなんで、おくんな」

「俺がいつガミガミ言った？　怒ってみてもどうにもならんことじゃあねえか、怒ってなおるものならなあ」

と言って黙った。暫くしておかねは、

「お前さんは、家だけでいる時は、怒っても仕方がないって言うけれど、人様の前じゃあ洟を拭けとか、あっちへ行っていろとか言うのもいいけれど、優しく言わないもんでいやだよ。聞いている人様だっていい気持はしないよ。茂がなんにも言いもしないでいるのに、そりゃあ茂は、始終洟を出しているよ。だけどあれは病気だよ、やっぱり脳が悪いんだね、そのせいだね、親が手をかけてやらなきゃあね。あれだってもう少し大きくなれば洟ぐらい自分でかむよ、きっと」

と言って清作の顔を見た。そしてまた考えたように、

「長作は丈夫で風邪を引くこともないで、まあまあいいけれど」

と言って継ぎを当てた足袋の指先を撫でながら、

「そのかわり、わるさもするがねえ、茂はボンヤリしていてわるさもできないよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

とおかねは、また溜息をついた。稗が煮えてきたので、清作は火を弱めて作り上げた草履を藁で束ねると、もんぺの膝を手で払い、草箒で掃いて、その屑を指先でちょっと丸め、炉へ投げ入れた。おかねはその間に立って、繕い物と針箱を次の間の境の帯戸のそばへ持って行き、その足で、戸棚から茶碗と茶筒を取り出した。煙草好きの清作はすぐ煙管を出して煙草を詰めると、とろとろ燃えている火の上へかざして火をつけた。一服吸うと、おかねの差し出す熱いお茶を左手で受けて一ぱい啜りながら、

「なあおかね、子供のことはお天とう様にまかせて、くよくよしないことだぜ。なんと思ってみてもどうにもならないことだからな」

と言った。

「そりゃあ、よくわかっているけれどねえ、今じゃあ学校ができて、男の子はみんな学校へ行くよ。だのに祐一や秀のようにゃあ学校へはとても行けないよ」

と言うおかねの言葉には、深い嘆きがあった。清作はすぐそれを打ち消すように、

「何を言う、そんな欲はかかないもんだ。頭のある子だって、端から学校へ行っちゃあいねえよ。学校のことより家で手伝いをさせることだ、どんなことでもいい、手伝いをな」

と言いつつ、煙管をおくら縁でぽんと叩いた。丸い吸い殻が転がった。また煙草を詰めると、火箸でおきを挟み、火をつけて、すっと吸った。おかねは火箸で灰をいじりながら、

「男の子は男親って言うけれど、あれ達がもう少し大きくなるまでは、やっぱりわしが気をつけて、他様に迷惑をかけないようにしなけりゃあねえ」

「そうだ、そうだよ、なんたってそばにいるのはおめえだもの。おめえの考えでやれよ。そうは言ったって俺もあれ達の父親だもの、困った時は一緒さ」

と言って、また煙管を叩いた。困った困ったと言っても、長作も茂男も、清作やおかねの言うことに逆らいはしなかった。ただ他の子供にくらべて覚えが遅く、また、忘れてしまうことは仕方ないとしても、目の動き、その動作に精神の伴わぬ空虚さがあって、清作やおかねの心を暗くさせてしまうのだった。

「背中が寒くなってきた、さあ寝るぜ」

と清作は立ち上がって、大鍋のつるへ手をかけ、鉤から下ろし両手で前へ提げ、中腰になりながら土間へ下りると、桶の上の大笊へぶちあけた。熱い湯気と稗の匂いが清作の顔を包んだ。おかねは赤いおきを十能に掬って炬燵へ運んでゆき、よく眠っている子供達の足に気を配りながらおきを埋めた。

清作が寝てからも、おかねはとろりとろり燃える火を消そうともせず、じっと見つめていた。長作や茂男のことは言うまいと思っていながら、また今夜もどうにもならないことを言って、清作に暗い思いをさせてしまった。清作が子供のことは、お天とう様にまかせて、くよくよしないことだと言ったことと、実家の母が「何ごとも神様の思召しと思って、真当に生きて行くことだよ。真当に生きる者に罰を当てたりはしない」と言ってくれたことを思ってみた。長作や茂男を思うおかねの心は、そのままおかねを思いやるおかねの母の心であった。その母の言葉が次々と浮かんだ。

「どこの子供もみんな神様からの授かりものだよ。誰だってお腹にあるうちから、どうぞよい子が

授かりますようにとお願いするけれど、なかなか思うようにはゆかないものだということはわかるね。良い子は自分の家へ、いけない子は他の家へ等と穏やかでないことを思う者には、穏やかな運は来ないものなんだよ。頭の利口の者がよいとも、頭のにぶい者が悪いとも決まっていないのだよ。だから長作や茂男のありのまんまを見て貰えばいいのだよ。少しでも世間様によく見せようと思えば心が疲れる、ありのまんまでいい。むずかしいことかも知れないが、それができれば心がやすまる。神様もお見捨てはなさらないからな」と繰り返し母が言ってくれた時は、素直な心になってわかったと思ったが、今こうして考えてみれば、自分にはとうていできそうもないと思った。ありのままを見て貰えと言うけれど、ありのままを見て貰った方が心が疲れるような気がする。心が疲れるのは恥ずかしいと思うためか、恥ずかしいなんて思うのはやはり母の言う通り、よく見て貰えないと思う引け目か。おかねは、母の言う言葉の意味をあれこれ心で問答してみたが、世の中を知り尽くした者と、若い者との相違は、容易に納得できぬものがあった。だがなんと言っても自分はあの子達を生んだ母親だ、悪い子にしてはならない、と誓うように繰り返し思うのだった。

鉄瓶を下ろして鉤を休めると、おかねは手洗へ立った。土間の厩では藁の中で馬が眠っている。静かな土間で笊にあけた稗の雫のみが、ぽたりぽたりと間をおいて小さな音を立てている。外に出ると、二十日の月がいつしか上っていて、隣家の草屋根も柿の木の枝も、黒々と夜空に浮いていた。日陰の根雪が白く目に映り、更けてゆく夜の静もりと、物の凍みる気配が音もなく肌にふれた。

村の四季

この坂井には、古くから北方に十一面観音様、南方に八幡様があって、村人の信仰の的となっていた。そして四月八日の花祭りの日に、この観音様のお祭りを行なった。観音様の隣の原氏の家で世話役を引き受け、戸ごとから白米を小茶碗一ぱいずつ集めて粉にひき、お団子を作って観音様に供えた。堂の前の庭に莚を敷いて、幼い孫を連れた年寄り達が集まり、ささやかなお祭りをした。なずなや芹のお浸しや野菜の煮つけを入れた重箱を拡げ、お茶を注ぎ合って楽しんだ。青空の下のまだ寒い春風を受け、知らず識らず片手を前掛の下や、袂の中へ入れながらも、嬉しそうに語り合う村人を、観音様は優しく見つめていて下さった。

南方の八幡様は、村の護り神として崇拝し、子供が生まれるとお宮参りに神前へ連れて行き、氏子にして下さるようにと拝んだものである、赤飯と神酒を供えて。また、武運の神としても信仰厚かった。この八幡様のお祭りは四月二十一日で、村社松島神社の祭礼の次の日に定められていた。若い者達の手で大幟が上げられ、提灯も下げられ、神主が祝詞を上げお祓いをして下さった。境内には一本の桜の木が枝を拡げていて、その花の下で祭りの酒もりをし、また歌も出て楽しく、去り難い風情であった。

観音様や八幡様は村の人の心の拠り所であり、神様、仏様に祈るのは不幸の時や願いごとの時ばかりでなく、信仰の厚い人は、一日と十五日と二十八日は、一ヵ月の佳い日と定め、その日の上へ

おの字をつけて、お朔日、お十五日、お八日といって、必ずお参りをした。自分の家の無事を祈る心は誰も同じことで、おかねも近くの観音様へお参りして一心に祈った。

「お見捨て下さいますな。あの子達に間違いのないようお守り下さい」

手を合わせて仰げば、観音様が自分をじっと見つめて下さるように思えて心が安まった。

子供を案ずる親心は、どこでも誰でも同じことで、遠い所の神様、仏様へもお参りに出かけた。その一つに、子供専門の祈祷所が木曽の薮原にあった。昔から伊那の人達はどこの家でも、幼い子供を連れて行って、虫封じのおまじないを受けたもので、中には二人連れて行く家もあった。中央線が開通されないうちは勿論だが、汽車が通うようになっても飯田線のないうちは、箕輪の人達は権兵衛峠を足で越えて木曽へ下ったものである。天候の心配の折りは雨具の用意もして山を越えて行ったのである。おまじないが、ほんとうに効くのか疑問を持つ人もあったが、もしその祈祷を受けなかったために、子供が健康でなかったり、癇の虫が強くて夜泣きの絶えない子になったり、親の諭しも聞けないような強情な子になってはいけないからと、一度は木曽へ行って悪い虫封じの祈祷を受けた。行ってくれれば安心で、その上での子供のことは致し方ないと諦めていた。

峠を越えて木曽へ行った人々には、色々の思い出話があるに違いない。その中の話の一つにこんなこともあった。

朝早く家を出て西箕輪の与地から登ったのである。峠を越えるには骨が折れるので、母親は荷物を提げ、父親が子供を負ったり、また代ったりして助け合いながら登ったのであった。ところがある家で負い人を頼んで行ったが、子供がどうしてもその男に負われるのを嫌って泣くので、仕方な

く麓まで母親が負って行った。満二才を半年も過ぎた男の子だったので、女の足ではとても峠を越えるのは無理なので、背中から下ろして、男に負って貰おうとしたが、子供はどうしても男の背に行かなかった。負い人の男は、若禿で頭がてかてか光っていたので、泣くのは自分の頭のせいだと思い、「これはわしの頭のせいかも知れないで、しっかり手拭で頬被りをしましょ」と言って、手拭で頭を包んで顎下でしっかり結んだ。男が頬被りを終えるまでは、母親に抱かれて泣きもせず、じっと男を見ていたが、

「さあ、坊ちゃ、おじさんにおんぶしてお山を越えましょ」

と言って紐を持つとまた母親に縋りついて泣き出した。泣くからと言っていては峠は越せないので、母親も思い切って泣き叫ぶ子供に紐をかけ、無理にその男に背負わせた。一緒に越える人達も、手伝うように子供に声をかけてなだめたが、そんなことではいっこう駄目で、男の背中で暴れ、しっかり被った手拭を両手で引張って外してしまい、その光った頭を泣きながら必死になって叩き出した。男はたまらず両手で頭を押え、

「これはこれは嫌われたもんだ、治郎左衛門じゃあないが、可愛さ余って憎さが百倍」

と芝居の真似をして見せて皆を笑わせ、

「姉様、じゃあ、峠まで坊ちゃの泣き声には耳へぼっちょをかって、我慢しておくんなね」

と振り返って、泣く子に耳を引張られたり、首を引掻かれながら、登って行った。連れの人達は口々に、

「虫除けのおまじないに行くのに、あんなに泣かせちゃあかえって虫が出るんじゃあないかねえ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook